



外国にルーツを持つ生徒とともに学び、「世界」を広げる

大阪府立東淀川高校

外国にルーツを持つ生徒のための抽出授業を充実

大阪府は、外国から帰国した者または外国籍を有する者で、日本語指導が必要な生徒のためのカリキュラムを提供する府立高校を8校設置し、特別枠入試「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」を実施している。その1校の大阪府立東淀川高校は、外国にルーツを持つ生徒を毎年16人受け入れている。

「本校では、同選抜で入学した生徒を『くろーばあ生』と呼んでいます。出身国は中国、ネパール、フィリピンなど13か国（2023年度）で、生徒は各教科の学習と、日本語・第1言語（母語）の学習、部活動等に積極的に取り組んでいます」（森瀬康之校長）

「くろーばあ生」は一般選抜で入学した生徒と同じクラスに所属。1年次は、保健体育（体育）、芸術、家庭、総合的な探究の時間、HR以外の教科は、易しい日本語を使った抽出授業（写真1）を「くろーばあ生」のみで受ける。

「日本で進学や就職ができるように、抽出授業でも一般選抜で入学した生徒と同じ教科書を使っています。多少扱う範囲を絞ったり、選択式の問題を中心にしたりするなどの配慮はしていますが、それでも生徒たちにとっては難しい内容が含まれています。ただ、『くろーばあ生』には大学進学を希望する生徒も多いため、高校で学ぶべき内容を易しい日本語を使いながら丁寧に教えています」（楊知美先生）

教師たちは、「くろーばあ生」は授業中の反応がよく、教えていて楽しい」



写真1 「くろーばあ生」16人の生徒を対象としている「数学I」の抽出授業。ルビを振ったプリントやリライト教材などを使い、易しい日本語で説明している。

「くろーばあ生」のために工夫した説明を通常授業でもしてみたら、とてもスムーズに理解してもらえた」などと、抽出授業を肯定的に受け止めている。2年次以降は、各生徒の日本語能力を踏まえ、教科ごとに抽出授業に参加す



楊知美
多文化共生推進委員会主催
やん・つーめい
同校に赴任して9年目。



酒井清夏
多文化共生推進委員会日本語指導担当
さかい・さやか
同校に赴任して8年目。



森瀬康之
校長
もりせ・やすゆき
同校に赴任して8年目。

るか、通常授業に参加するかを決める。

ともにいることで支え合うことを学ぶ

「くろーばあ生」に対する支援で特

学校概要

設立 1955（昭和30）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年240～280人
2022年度卒業生進路実績 4年制大は、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ158人が合格。短大・専門学校進学109人。就職15人。

コラム 日本語指導が必要な児童生徒の状況

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(21年度)」によると、日本語指導が必要な児童生徒数(外国籍・日本国籍合計)は、小・中学校、高校で計5万8,307人で、18年度調査に比べて約14.1%増加した。

日本語指導が必要な中学生等の高校等への進学率は89.9%(全中学生等の進学率は99.2%)だが、高校生等の中退率は6.7%と、全体の1.0%に比べても高い。大学等への進学率も51.8%と、全体の73.4%に比べると低い状況にある。そして、就職者における非正規就職率は39.0%であり、全体の3.3%の約12倍に上った。日本語の授業の充実を始め、生徒一人ひとりが希望進路を実現するための支援が求められている。



写真2 1年生の「くろーばあ生」は全員、週2日の部活動「多文化研究部」に参加。文化祭などで自国の文化や生活について紹介することは、自尊感情を高めることにつながる。

に大切にしていることは、それぞれの生徒に自分のルーツを語る機会を与え、自尊感情を高めることだ(写真2)。同校では、生徒一人ひとりが第1言語を学ぶ時間を設けているため、1人の生徒のためであっても、その言語を第1言語とする教師を大学やNPOなどを通じて探し、授業を担当してもらっている。

ト役を務め、一般選抜で入学した生徒に英語を教える一方で、一般選抜で入学した生徒が、「くろーばあ生」に漢字や日本の歴史を教えるなど、生徒は支え合いながら学んでいる。

「日本とは違う環境で学んできた『くろーばあ生』とともに学校生活を送ることで、一般選抜で入学した生徒も、人は一人ひとり違ってよいことを学んでいます。近年、外国にルーツを持つ生徒と一緒に学びたいという理由で本校を志望する中学生が増えています。が、多様な人が支え合い、学び合うことの大切さを、中学生も気づいているのだと思います」(森瀬校長)

「生徒たちは、3年間の高校生活を通して、外国人についての理解を深め、

自然にかかわる力を身につけています。生徒たちは確実に『世界』を広げていると感じています」(酒井先生)

日本語指導を必要とする生徒のためのカリキュラムを持つ高校はまだまだ少なく、先駆的に取り組む大阪府であっても、現状の定員ではニーズを満たせていないという。

「外国にルーツを持つ生徒と日本にルーツを持つ生徒がともに過ごす3年間は、双方に大きな意味があります。日本が目指す未来の社会のあり方を考えると、そうした教育の場が全国にもっと広がってほしいと思います」(楊先生)

生徒の声

JAHANGIRI DANIALさん

(2年生/イラン・イسلام共和国出身)



中学2年生の時から日本の学校で学んでいます。最初は日本語で自分から話しかけることはとても恥ずかしかったけれど、勇気を出して声をかけていったら、たくさん友人ができました。高校ではバレーボール部に入り、勉強も部活動も頑張っています。将来は日本で進学し、建築について学び、日本で働きたいです。日本にも多くの外国人が暮らしていますが、高校時代にいろいろな国の人と友人になれたので、きっと仲よくやっていけると思います。

間瀬和哉さん(2年生)



僕は、特別枠入試のことを知らずに入学しました。だから学校に外国人が多くて驚きました。外国の人とは話したことがなかったので、話しかけるかどうかわざわざ話してみたいという気持ちで勝り、自分から話しかけた相手がDANIALでした。英語がうまく、優しいDANIALは、何でも気軽に話せる大切な友人の1人です。最近では街で外国人とすれ違くと、今まで以上に「どこから来た人かな? 話してみたいな」と思うようになりました。